

## 論文の内容の要旨

論文題目 漢字文化における文字遊戯の近代的形成—燈謎を例にして—

氏 名 吳 修喆

本論文は、燈謎<sup>とうめい</sup>という文字遊戯を漢字文化の一分野として捉え、その文体及び実践形態の近代的形成の過程を論じるものである。特に燈謎創作者である「謎人」のアイデンティティの形成と変化を中心に分析することにより、これまでの研究で見落とされていた近代漢字文化史の新たな側面を明らかにし、日常類書や章回小説などの書誌媒体と結び合わせて考察をした上で、その近代的形成のプロセスを浮き彫りにすることを主な目的とする。

清末から民国にかけて、ブームとなって発展し、今もなお愛好家による活動によって生き続けている漢字文化の一つとして、漢字の形・音・義（意味）を利用し、文学的に書かれる「謎」というものがある。各時代において、こういった謎はさまざまな名称で呼ばれてきたが、現代中国において最も広く用いられるのは「燈謎」である。宋代から始まった燈謎という漢字文化は現在でも、大陸を始めとする漢字文化圏の地域で現存しており、依然として元宵節の民俗イベントとして行われている。

1907年から日中戦争が始まる1937年までの30年間、数多くの謎話作品が雑誌に掲載・出版され、燈謎の歴史においてブーム的發展を見せたが、1937年以降は戦乱や文革、社会主義的政策などが原因で、燈謎の發展は長い冬の時代に入った。そして、再び大衆の視野に入ったのは1980年代ごろであり、当時の「文化論ブーム」を背景に、全国各地（台湾・香港・マカオを含む）で新しく「謎社」が結成され、燈謎愛好家の交流が一時期盛んになっていた。詳しくは各章で適宜紹介していくが、もっとも彼らの努力によって資料集がいくつか出版されたものの、学術的研究は未だ殆ど着手されておらず、先行研究が少ない状況が続いている。

現在、大陸では、中華燈謎学会という全国的な愛好家団体があり、また、福建省漳州市を代表とする漳州地方では、燈謎芸術記念館が立ち上げられ、国際的な燈謎大会を毎年のように開催されている。現代における謎人のコミュニケーションネットワークは、清末民国期に比べて更に広い範囲に及ぼしているものの、それらの交流活動の殆どはアカデミックから離れており、民間団

体によって加担されている。

本論文は燈謎という漢字文化を通して、「今体」「古体」の差を文体論的アプローチで紐解き、「書家」「江湖」の別を社会文化論的に捉え、近代において徐々に形成してきた「謎人」という下層知識人集団の創作意識を分析し、その変容を論じるものである。個々の作品、作者、作風に対する整理と分析も重要な一環だが、本論文では、個別的・具体的な燈謎作品ではなく、主として燈謎をめぐる言説・現象を主な研究材料とした。謎人という創作主体を掘り起こすとともに、漢字文化の近代的形成に対する新たな捉え方を提示し、その根底に潜んでいる爆発力を描き出した。全五章にわたって燈謎を例に、漢字文化における文字遊戯の近代的形成を文体・実践形態の二つに分けて分析し、その変容と創作者である謎人の創作意識を浮き彫りにした。

第一部「燈謎の近代的文体の形成」の論証を通して、燈謎の近代的文体の形成過程を相対的に把握し、燈謎のような文字遊戯が知識人文化と民間文化の境界線上を幾度となく揺れ動く様子を示した。

第一章では、燈謎という中国特有の漢字文化を研究するための基礎作業として、九種の明末日用類書を用いて、収録された燈謎の内容と編集スタイル、燈謎がどの部門に分類されているか、その部門が目録全体において占める位置及び部門内部での燈謎に対する分類などを比較し、明末社会における燈謎に対する認識と、日用類書が燈謎の創作スタイルにもたらした変化は何かという問題を検証した。

第二章では、燈謎と章回小説の結びつきを、宋代の説話文芸の一つである「商謎」に遡って考察し、「商謎」と燈謎の関係をあらためて整理することで、「商謎」から見られる筆記小説の要素を提示した。『謎史』が提示した燈謎と章回小説の関係について、章回小説に収録されている燈謎はもともと小説の人物描写をより豊かにするための技法であり、それを直ちに燈謎の技法や文体の発展を論じる材料とするには限界があることを示し、銭南揚のいう「時勢」を具体的に、章回小説という文学ジャンルの創作スタイルの変化や小説作者の社会的な地位の変化などと捉え、燈謎の創作趣向の変化との間に存在する関連性について考察した。

第三章では、清末民国期に新聞、雑誌等に発表されるようになった「謎話」を手がかりとして、この時期に事物謎から文義謎までを含む「謎」という雑多性のある大分類から「燈謎」という精錬された概念が分離・析出されてくる過程をたどり、その過程と積極的に関わった人物に見られる意識の変化を、その過程を傍らから見る傍観者や、その対極に立つ中国民俗学の先駆者たちが持つ意識と比較しながら整理・分析し、「燈謎」をめぐる文人意識が変化する時代的・文化的な背景と、燈謎の発展過程に生じる変化との関連性を明らかにした。

第二部「燈謎の近代的実践形態の形成」では、燈謎の実践形態の近代化を中心に論じた。具体的には、台湾と大陸の事例を分析し、異なる政治イデオロギーの色を帯びる具体的なコンテキストにおいて、燈謎創作に見られる危機の現れ方、および異なった危機の解決策・言説・実践の派生を考察した。謎社の事例を通して、燈謎の実践形態に見られる転換点に注目しつつ、その連続性を深くまで掘り起こす作業を行った。

第四章では、対抗的な政治イデオロギーに基づいた異なる文化政策の下で、同じルーツを持つ文化ジャンルがどのようにしてローカル・アイデンティティを創出するかを研究する基礎作業として、台湾の謎人と謎社に焦点を与えた。漢字文化の受容と近代国家の文化政策の関係性を明らかにするために、文化政策の視点に沿って、台湾における燈謎の歴史と活動状況を整理し、とりわけ、中華文化復興運動前後の様子を比較した上で、清代中期から現在にかけて台湾で燈謎活

動が存続する理由、および台湾燈謎が現在直面している問題を中心に検証した。

第五章では、戦後から90年代までの大陸に焦点を当て、近代的な文体が形成した漢字文化の新ジャンルである燈謎がどのように中国共産党の文化政策に包括・統制されるようになったか、謎人の創作意識と燈謎活動形態の変化との関係を明らかにした。そして、第五章の末尾では、第二部で整理した近代台湾と大陸における燈謎活動の様相の異同をまとめた。大陸と台湾の比較を通して、謎人の創作意識と主流イデオロギーとの関係性が浮き彫りになった。

終章では、序章において提示した近代における謎史構築の問題点と課題を、本論文がこれまでの各章で論証して得た新たな研究成果によっていかに解決し得るかという視点から全体を振り返り、各章で得られた知見がどのように関連するのかを改めて整理して提示した。

本論文は全体を通して、燈謎を例にした漢字文字遊戯の七世紀を亘る変遷を、「エリート-民間」という座標軸において考察した。そこには時代的・イデオロギー的差異を超越した漢字文化の本質が保存されているように思われる。総括的に言えば、漢字の文字遊戯は漢字の完成過程を逆転させ、意味の伝達と意味の解体を同時進行する装置である。本論文で主に取り上げた「今体」燈謎を例にすれば、謎面となる儒家經典の文句が読み取られるのと同時に、文章本来の意味で読むではいけないという真逆な意識が発動される。つまり、文字通りの理解を回避しつつ、別の意味での「文字通り」を再構築していくというアプローチである。漢字語彙の多義性を利用して、別の意味で読み替えていく、または本来の語彙・文字を分解し変形させるなど、多様な技巧が使用されている。それらの技巧は漢字の表意文字としての性質と直結しており、伝統文学の主流に吸引されつつも、近代以降の新しい文化環境への即応性を持ち合わせている。創作意識や実践形態が「文学」と「モダニティ」を介して時代性を露呈していったが、文字遊戯自体は常に漢字と意味の乖離性を礎にしているため、活火山のような瞬発的な破壊力を内包している。時には外来文化に対する抵抗として、時には意義の解消と感覚の再構築として現れ、その成長性と不確定性は歴史化する可能性を秘めている。